

(一三)千島樺太交換事件ヲ問フ 樺太ハ徳川氏ノ時、開拓ノ緒ニ就キシモ、後久シク拋棄セシナ以テ、其ノ南部ニハ蝦夷人住シ、北部ニハ露西亞人、滿州人等次第ニ移住シテ遂ニ全島ヲ押領セントスルノ勢アリキ、幕府ノ末年曾テ露人ト國境ヲ議定セントセシニ、露人聽カズシテ全島遂ニ兩國民雜居ノ姿トナリ、斯クテ維新ノ初メ又其ノ疆界ヲ定メントシテ成ラズ、是ニ於テ明治八年露國駐劄公使榎本武揚ヲシテ露國政府ト談判セシメ、遂ニ樺太全島ヲ彼ニ讓リ、之ニ換ヘテ千島ヲ我ニ收メ以テ事局ヲ結ビタリ。

(一四)征韓論ノ顛末ヲ問フ 維新ノ初メ、朝廷屢ニ使ヲ朝鮮ニ遣ハシテ舊好ヲ尋ガントセシニ、彼其ノ使ヲ卻ケ、且答フル所無禮ナリシカバ、當時陸軍大將タリシ西郷隆盛等、大イニ怒リ、首トシテ征韓ノ議ヲ唱フ、然ルニ會ニ歐米文物ノ視察ヲ遂ゲテ歸朝シタル全權大使岩倉具視、副使木戸孝允、大久保利通等、内治未ダ整ハザルニ、俄ニ師ヲ外國ニ用フルハ得策ニ非ズトテ、征韓ノ議ヲ排

セシヨリ、隆盛ヲ初メ、之ト説テ同ジウセル江藤新平、副島種臣、後藤象次郎、板垣退助(共ニ參議タリ)等、前後相繼ギテ職ヲ辭シ、世論紛々タリキ、是實ニ明治政府變動ノ起端ニシテ、時ニ、明治六年ナリキ。

(一五)民撰議院設立ノ建議及ビ佐賀、熊本ノ内亂事略ヲ問フ 明治七年一月、副島、板垣、後藤、江藤連署シテ表ヲ上リ、民撰議院ノ設立ヲ請ヒシニ、朝廷尙早シトシテ納レズ、江藤新平益々不平ヲ懷キ、郷里佐賀ニ歸リテ征韓黨ノ首領トナリ、同郷人島義勇ト相結ビテ兵ヲ擧ゲ、縣廳ニ迫リシカバ、朝廷、内務卿大久保利通、陸軍少將野津鎮雄等ヲ遣ハシテ之ヲ鎮撫セシメ、新平、義勇ヲ捕ヘテ斬ニ處セリ。是ヲ佐賀ノ亂ト云フ、此ノ後一年ヲ隔テ熊本ノ士族等新政ヲ喜バズシテ神風連ト稱スル黨ヲ結ベル者、暴發シテ鎮臺指令官種田政明ヲ殺シケルガ、陸軍少將大山巖等討チテ之ヲ平ゲタリ、之ヲ熊本ノ變ト云フ、時ニ山口ノ藩士前原一誠之ニ應ジテ兵ヲ款ニ起シケルガ、是亦幾モナク鎮定セリ。

(一六)鹿兒島戰亂ノ顛末概要ヲ問フ 西郷隆盛既ニ郷里鹿兒島ニ歸隱シテ後、桐野利秋、篠原國幹等ト共ニ私學校ヲ興シ、專ラ壯士ノ養成ヲ務メケルガ、明治十年一月、天皇、京都大和ニ行幸シ給フニ際シ、私學校ノ生徒等、隆盛ヲ擁シテ主將トシ、政府ニ問フ所アリト稱シテ兵一萬五千ヲ率キ、鹿兒島ヲ發シテ先ヅ熊本城ヲ圍ミシガ、所在之ニ應ズル者頗ル多カリキ、然ルニ熊本ノ鎮臺司令長官谷干城、固守シテ動カズ、而シテ急ヲ行在ニ報ズ、勅シテ隆盛以下ノ官位ヲ削リ、有栖川熾仁親王ヲ征討總督トシ、陸軍卿山縣有朋、海軍大輔河村純義ヲ參軍トシ、兵ヲ發シテ之ヲ討ゼシメ給フ、賊軍頗ル猖獗ナリシカバ、更ニ勅シテ陸軍中將黒田清隆ヲ參軍トシ、少將山田顯義等ヲシテ別働隊ヲ率キテ賊ノ背後ヲ衝カシメ、此ノ歲四月熊本城ノ圍初メテ解ケテ、内外ノ連絡相通ズルヲ得タリ、是ヨリ賊勢大イニ挫ケ、官軍、肥後、日向ノ各地ニ轉戦シテ遂ニ賊ヲ鹿兒島ニ蹙メ、之ヲ城山ニ圍ミケレバ、隆盛以下皆自殺シ、亂全ク平ギヌ、

時ニ九月二十四日ナリ。

(一七)鹿兒島戰亂ノ利害ヲ問フ 此ノ役ヤ、政府兵ヲ役スルコト六萬餘人、戦死セシ者六千八百餘人、軍費四千百六十萬圓ニ上リテ、頗ル帝國ノ財政ヲ紊シ、カド、爾來天下皆新政ノ動カスベカラザルヲ知り、復兵力ヲ以テ政府ニ抗スル者ナキニ至リ、而シテ政府ハ專ラ力ヲ内治ノ改良ニ致スコトヲ得タレバ、其ノ利決シテ鮮カラザリシナリ。

(一八)地方官會議ノ起元ヨリ憲法發布、國會開設ニ至ル迄ノ事實概要ヲ問フ 今上天皇、登極ノ初、五事ヲ誓約シテ立憲ノ基礎ヲ定メ給ヒ、其ノ後民撰議院設立ノ建議アリシ等ヨリシテ、議院ノ論朝野ノ間ニ噴々タリシガ、明治八年五月初メテ地方官ヲ東京ニ召集シテ會議ヲ開キ、以テ上下壅蔽ノ患ヲ防ガンコトヲ計ラル、是即チ地方官會議ノ起元ナリ、同十二年ニハ、府縣會ヲ各地方ニ開キ、民間ヨリ議員ヲ公選シテ、地方税ノ徵集支辨等ヲ議セシメラル、然ルニ民間ニハ

民權自由ノ說漸ク盛ニナリテ、政社ヲ結ビ、國會開設ヲ請願スル者陸續東京ニ上リキ、同十四年十月、詔シテ、明治二十二年ヲ期シ國會ヲ開キ、維新ノ誓約ヲ果サント告グ給ヒシガ、遂ニ明治二十二年二月十一日ノ紀元節ヲトシ、爰ニ帝國憲法發布ノ大典ヲ舉行セラレ、併セテ皇室典範ヲ定メ、以テ皇位繼承、皇族、皇室御料等ノ事ヲ明カニシ給ヘリ、翌年十一月詔シテ、貴族院及ビ衆議院ノ議員ヲ東京ニ召集シ、天皇親臨シテ、帝國議會ノ開院式ヲ舉グサセ給フ、是ニ於テ我が國ハ立憲政體ノ國トナリ、億兆皇澤ニ浴シテ以テ今日ノ盛ヲ致セリ。

(一九)憲法ノ大綱要ヲ問フ 帝國憲法ハ、七章七十六條ヨリ成リテ、第一章ニハ天皇ノ大權、第二章ニハ臣民ノ權利義務、第三章ニハ帝國議會ノ性質權限、第四章ニハ國務大臣及ビ樞密顧問ノ職責、第五章ニハ司法權、第六章ニハ會計ノ事ヲ規定シ、第七章ニハ補則ヲ收メタリ。

(二〇)朝鮮江華灣事件ヲ問フ 明治八年九月、朝鮮人我が軍艦ヲ該國江華灣

ニ砲撃セシカバ、陸軍中將黒田清隆ヲ特命全權辦理大臣トシ、議官井上馨ヲ副使トシテ朝鮮ニ遣ハシ、其ノ暴舉ヲ詰リシニ、朝鮮其ノ罪ヲ謝シ、因ツテ通商條約ヲ定メタリ。

(二一)明治十五年朝鮮ノ變ヲ問フ 江華灣事件ノ後ハ朝鮮頗ル改進黨主義ヲ執リテ、我ト好チ厚ウシケルガ、當時其ノ政府ニ獨立、事大ノ二黨アリ、一ハ專ラ獨立主義ヲ執リテ我ニ依頼セントシ、一ハ舊ニ依リ大ニ事ヘテ清國ノ幕下タラント欲シ、兩黨ノ軋轢日ヲ逐ヒテ甚シカリキ、會朝鮮ノ兵士不平ヲ懷クニ乘ジ、事大黨ノ首領大院君、暗ニ之ヲ煽動セシカバ、兵士等暴發シテ王宮ヲ犯シ、轉ジテ我が公使館ヲ襲フ、辨理公使花房義質防戦シテ仁川ニ逃レシガ、府兵又襲撃セシカバ、奮戰ノ後濟物浦ニ走り、英船ニ投ジテ長崎ニ還リヌ、時ニ明治十五年七月ナリキ、朝廷乃チ命ヲ義質ニ傳ヘ、兵ヲ率キテ京城ニ入り、其ノ暴舉ヲ詰責セシメシニ、韓廷大イニ懼レテ償金ヲ出シ、且亂魁ヲ刑シテ其ノ

罪ヲ謝セリ。

(二二) 明治十七年朝鮮ノ變ヲ問フ 明治十五年變亂ノ後、我が朝鮮ノ公使館ニハ衛兵ヲ置クコト、ナリシニ、清國モ亦兵ヲ此ノ國ニ屯在セシメタリ、此ノ頃韓廷ニハ獨立、事大兩黨ノ軋轢益甚シク、明治十七年十二月ニ至リ、獨立黨ノ首領金玉均、朴永孝等、事大黨ノ大臣閔泳翊等ヲ殺セシガ、當時我が公使竹添進一郎、國王ノ請ニ因リ、兵ヲ率キテ王宮ヲ守衛セシニ、清兵、暴徒ヲ助ケテ我が兵ヲ撃チ、併セテ公使館ヲ焚ケリ、公使難ヲ仁川ニ避ケ、金玉均、朴泳孝我が國ニ來投ス、朝廷乃チ外務卿井上馨ヲ特命全權大使トシ、兵ヲ率キテ朝鮮ニ赴キ、其ノ罪ヲ問ハシメケルニ韓廷又償金ヲ出シ暴徒ヲ刑シテ罪ヲ謝セシヲ以テ事止ミヌ。

(二三) 天津條約トハ何ゾ 明治十七年朝鮮ノ變亂アリテ後、參議伊藤博文特派全權大使トナリ、清國ニ赴キテ、李鴻章ト天津ニ會議シ、日清兩國互ニ朝鮮

ノ駐兵ヲ撤回シ、爾後、朝鮮ニ内亂アリテ兩國兵ヲ派遣スルトキハ互ニ知照スベキ事等ヲ約セリ、之ヲ天津條約ト云フ。

(二四) 日清交戦ノ端緒ヲ問フ 明治二十七年三四月頃、朝鮮ニ東學黨ト稱スル叛民蜂起シ、到ル處吏民ヲ殺シ物品ヲ掠メテ暴橫ヲ極メケルニ、韓廷力微ニシテ之ヲ鎮定スルコト能ハザリキ、此ノ際、清國ハ天津條約ヲ無視シ、朝鮮ニ叛亂アルヲ機トシ、名ヲ屬邦ノ靖難ニ藉リテ、大兵ヲ朝鮮ニ派遣セシカバ我が國亦在韓ノ帝國臣民ヲ保護スル爲メ、兵ヲ朝鮮ニ派遣セリ、ヤガテ叛亂略平ギシカバ、將來我が國ハ清國ト共ニ朝鮮ノ内政ヲ釐革シ、獨立ノ基ヲ圖ラシメント計リシニ清國ハ之ニ應ゼザルノミナラズ、却テ之ヲ妨グントシ、頻リニ我が兵衆ヲ撤回センコトヲ求メキ、會々七月二十五日、清國ノ軍艦、朝鮮ノ豐島沖ニテ、無禮ニモ、我軍艦ヲ砲撃セシカバ、我が軍艦應戰シテ大イニ之ヲ破リ、運送船一艘ヲ打沈メ、操江號ト名クル砲艦ヲ捕獲セリ、是實ニ日清開戦ノ端緒ナリキ。

(二五) 牙山、平壤ノ陷落ヨリ威海衛陷落ニ至ル迄ノ概要事實ヲ問フ。明治二十七年七月二十八日、我が京城ノ陸軍ハ南進シテ牙山ノ清兵ヲ擊攘シ、八月一日、天皇、宣戰ノ勅ヲ發シ給フ、此ノ時、牙山ニ敗績シタル清兵、奔リテ平壤ニ據リ、援軍亦來リ合シ、更ニ南下シテ我ニ迫ラントスルノ勢アリ、是ニ於テ第五師團長陸軍中將野津道貫、諸軍ヲ督シ、三道並ビ進ンデ、九月十五日平壤ヲ包圍攻撃シテ之ヲ陷ル、之ト同時ニ海軍中將伊東祐亨ガ率キタル我が艦隊ハ大孤山沖ニテ清ノ艦隊ニ遭遇シ、激闘ノ後、敵ノ軍艦三艘ヲ擊沈メ、一艘ヲ燒燬シタリ、此ノ大捷ニ先ツコト數日、天皇、大本營ヲ廣島ニ進メ、更ニ兵ヲ増發シテ、在韓ノ兵ト共ニ支那ニ進撃セシメラル、之ヲ第一軍ト云フ、第一軍ハ十月ノ末ニ、鴨綠江ヲ渡リテ清國ニ入り、九連城、鳳凰城等ヲ陷レ、海城ヲ破リ、尋イデ牛莊、營口ヲ略シ、向フ所殆ンド敵ナシ、別ニ組成シタル第二軍ハ花園河口ニ上陸シ、金州城ヲ陷レ、大連灣ヲ取り、十一月廿二日、遂ニ旅順ノ砲臺

ヲ奪ヒ、其ノ一部ハ榮城灣ニ上陸シテ、威海衛ヲ攻メ之ヲ陷ル、我が軍乃チ海陸ヨリ彼ノ北洋艦隊ヲ攻撃シケルニ、清ノ水師提督丁汝昌、事ノ爲スベカラザルヲ視、殘艦及ビ兵器砲臺ヲ我ニ納レテ降ヲ乞ヒ己ハ遂ニ自殺セリ、是ニ於テ著名ナル北洋艦隊全ク殲滅ス、時ニ明治廿八年二月ナリキ。

(二六) 日清媾和及ビ遼東還附ノ顛末ヲ問フ。北洋艦隊全滅ニ先チ清國ハ屢使ヲ遣ハシテ和ヲ請ヒシガ、其ノ使節ノ資格ヲ闕ケルヲ以テ之ヲ却ケタリ、是ニ於テ北洋大臣直隸總督李鴻章、頭等欽差全權大臣ノ任ヲ帶ビテ來リ、我が全權辨理大臣伊藤博文、外務大臣陸奧宗光ト馬關ニ會見シテ媾和ノ條件ヲ議シ、遂ニ清國ハ朝鮮ノ獨立ヲ承認スル事、遼東半島、臺灣諸島、澎湖列島ヲ我ニ割與スル事、償金二億兩ヲ我ニ納ル、事、新ニ諸港ヲ開キテ通商ノ便ヲ計ル事等ヲ約シテ、明治廿八年四月和議全ク成リヌ、然ルニ露、獨、佛三國同盟シテ我ニ忠告スラク、日本ガ永久ニ遼東半島ヲ領有スルハ東洋平和ノ利ニ非ズト、乃チ

奏請シテ遼東半島ヲ清國ニ還附シ、其ノ代償トシテ金三千萬兩ヲ收メタリ。

(二七)臺灣征服ノ顛末概要ヲ問フ。日清媾和ノ前、陸軍大佐比志島義輝ヲシテ混成支隊ヲ率キ、支那ノ南部ヲ略セシメ、明治廿八年三月先ヅ澎湖島ヲ取りシガ、會和議成リテ臺灣我が版圖ニ歸セシカバ、乃チ總督府ヲ臺灣ニ置キ、海軍大將樺山資紀ヲ總督トシテ其ノ地ヲ鎮撫セシム、然ルニ清人劉永福土民ヲ煽動シテ我ニ抗シ、其ノ勢頗ル猖獗ナリシカバ、更ニ近衛師團及ビ第二師團ノ兵ヲ發シテ之ヲ征討セシム、時恰モ夏期ニ際シテ炎熱燬クガ如ク疾疫流行シテ行軍困難ヲ極メシガ、十一月ニ至リ全島略平ギヌ、此ノ間ニ師團長能久親王疫ニ罹リテ薨ズ、天下之ヲ惜シマザルモノハナカリキ。

(二八)維新以來政治機關ノ沿革概要ヲ問フ。明治政府當初ノ官制ハ概ネ大寶令ノ制ヲ斟酌セシニ過ギズシテ、即チ大政ノ出ヅル所ヲ太政官トシ、其ノ下ニ民部、大藏、兵部、刑部、宮内、外務等ノ諸省アリテ各其ノ名ノ如キ事務ヲ

掌リ、太政官ニハ太政大臣、左右大臣、大納言、參議等アリ、各省ニハ卿、輔等アリ、地方ニハ開拓使長官、府知事、縣令アリテ、官等ハ勅任、奏任、判任、ノ別アリキ、神祇官ハ太政官ノ上ニ班セシガ、後之ヲ廢シ、諸省ニモ亦廢置分合アリタリ、斯クテ明治十八年十二月ニ至リ、參議伊藤博文等歐洲諸國ノ官制ヲ參酌シテ、大イニ改革ヲ行ヒ、太政官ヲ廢シテ內閣ヲ設ケ內務、外務、大藏、宮内、陸軍、海軍、文部、司法、農商務、遞信ノ十省ヲ定メ、太政大臣以下各省ノ卿輔等ヲ改メテ、內閣ニ總理大臣ヲ置キ、各省ニ大臣ヲ置キ、以テ內閣ヲ組織セリ、但シ宮内大臣ハ專ラ宮中ノ事ヲ掌リテ內閣ニ列セズ、同時ニ又文官登庸試驗法ヲ設ケテ濫進ノ弊ヲ防ギ、公文式ヲ定メテ、法律、勅令、閣令、府縣令等ノ制ヲ立ツ、尋イデ宮中ニ樞密院ヲ設ケテ顧問官ヲ置キ、以テ天皇ノ諮詢ニ備フ、後又拓殖務省ヲ置キ、臺灣及ビ北海道ノ事務ヲ總轄セシメシガ、更ニ之ヲ廢シタリ、地方ニハ、開拓使、北海道廳トナリ、縣令ハ知事ト改稱セラレ、

一廳三府四十三縣トナリヌ、尋イデ市町村制、府縣制、郡制ヲ布キ、地方自治ノ制ヲ立ツ、斯クテ臺灣我が領土ニ歸セシヨリ、六縣ヲ増置シ其ノ下ニ三廳ヲ設ケ、之ヲ統ブルニ臺灣總督府ヲ以テス、是即チ現今ノ制度ナリ。

(二九) 諸法律制定ノ概要ヲ問フ 明治初年ニ、太政官中ニ刑法官ヲ置キ、徳川幕府ノ刑法ヲ釐正シテ假ニ之ヲ用ヒシガ、二年七月、刑法官ヲ廢シテ刑部省ヲ設ケ、明清律ヲ參酌シテ新律ヲ纂定セシム、新律綱領是ナリ、然ルニ四年七月又刑部省ヲ廢シテ更ニ司法省ヲ置キ、各國ノ法律ヲ參酌シテ改定律令ヲ定ム、明治十五年、更ニ佛國ノ法律ニ基キテ刑法、治罪法ヲ制定セシガ、二十二年二月憲法發布ニ繼イデ民法、商法、行政裁判法、民事訴訟法、裁判所構成法等ヲ公布シ治罪法ヲ廢止ス、但シ民法商法ノ一部ハ一旦發布セラレシガ、尙不完全ナル點アリトテ、再ビ審査考定ニ附セラレタリ。

(三〇) 兵制ノ概要ヲ問フ 兵制ハ舊幕ノ末年、既ニ改革ニ着手セシガ、慶

應三年ニ陸軍學校ヲ設置シ、尋イデ海軍學校ノ設立アリ、而シテ陸軍ハ佛式、海軍ハ英式ヲ傳習セシメキ、明治四年廢藩置縣ノ頃、御親兵及ビ鎮臺ノ兵ハ、皆舊藩ノ士卒ヲ用ヒラレシガ、五年ニ至リ、徵兵令ヲ發シテ、壯丁ガ國ヲ護ルハ國民ノ義務ナルヲ告諭セラレ、上古徵兵ノ制復興レリ、其ノ法、全國ノ壯丁ハ検査合格ノ上、抽籤ヲ以テ三箇年ノ現役ニ服ス、之ヲ常備軍ト云フ、現役終ルノ後、猶四年ノ間ハ戰時直チニ召集セラレ、ノ責アリ、之ヲ豫備軍ト云フ、豫備ノ後五年ヲ後備ト云ヒ、豫備ニ繼ギテ召集セラレ、西南ノ役、臺灣ノ役、殊ニ日清交戦ハ、皆軍備ヲ擴張スルノ好機ヲ與ヘ、日清交戦前ハ、全國六師團、現役大凡六萬人、豫備、後備ヲ合セテ二十七萬人ナリシヲ、戰争後、俄方二十二師團ニ増加セラレ、殊ニ海軍擴張ニ力ヲ用ヒ、清國ヨリ收容セル軍艦ノ外、更ニ數艘ノ大艦ヲ新調セラレタリ。

(三一) 維新以來學制ノ沿革大要ヲ問フ 學制ニ付テハ、維新ノ初メ、舊幕府ノ

設置セル昌平校、醫學所、開成所ヲ基トシテ大學ヲ建テシガ、後許多ノ變遷ヲ經テ今ノ帝國大學トナレリ、殊ニ明治四年始メテ文部省ヲ置キ全國ノ教育ヲ總轄シ、尋イデ大中小學校ノ學制ヲ頒布シ、男女六歳以上ノ者ハ、悉ク學ニ就カシムルコト、ナリタルヨリ、教育一般ニ普及シテ、復不學ノ徒ナキニ至レリ、明治十二年、舊學制ヲ廢シテ更ニ教育令ヲ布キ、後又之ヲ改正シテ益々教育ノ進歩ヲ計レリ、然ルニ德育ノ標準未ダ定ラザルヨリ、天下其ノ嚮ウ所ニ惑ヒシガ、明治二十三年十月、天皇勅語ヲ下シテ德育ノ方針ヲ定メ給ヒシヨリ、教育ノ基礎爰ニ定リテ、萬古不磨ノ典範トナリヌ。

(三三) 維新以來貨幣本位ノ沿革ヲ問フ 維新ノ初メ、大イニ貨幣ノ制ヲ改革セラレ、金貨ヲ以テ本位ト定メ、二十圓、十圓、五圓、二圓、一圓ノ五種ヲ發行シ別ニ一圓銀貨ヲ發行シテ、只各開港場ニ限り通用セシメ、之ヲ貿易銀ト稱シケルガ、明治十一年五月、更ニ銀貨ヲ一般ニ通用セシムルコト、定メシヨリ、金本

ノ制ハ、金銀複本位ノ制ニ變ジ、續キテ兌換銀行券等ハ總テ銀貨ト交換シ、從ツテ萬般ノ取引モ亦銀貨ヲ使用スルコト、ナリケレバ、再變シテ銀本位ノ姿トナリ、金貨ハ僅カニ其ノ名ヲ存スルニ過ギザリキ、然ルニ世界ニ於ケル銀ノ產出次第ニ増加シ、而シテ金ノ產出之ニ伴ハザル等ノ事情ヨリ銀ノ價益々下落シ、其ノ極金一ニ對スル銀ノ價ハ三十七八トナリ、貿易上ハ勿論公私一般ニ不利ヲ被ルニ至ラントス、是ニ於テ明治三十年二月勅令ヲ以テ、新ニ貨幣ノ制ヲ頒布セラレ、純金ノ量目二分ヲ以テ單位即チ圓トシ、金貨ハ二十圓、十圓、五圓ノ三種ニ定メ、別ニ補助貨トシテ五十錢、二十錢、十錢ノ銀貨、五錢ノ白銅貨、一錢及ビ五厘ノ青銅貨ヲ發行セリ、サテ從來發行ノ金貨幣ハ新金貨ノ倍位ト定メ、又舊一圓銀貨ハ新金貨一圓ノ割合ヲ以テ、明治三十一年四月ヲ限り悉皆引換ヘラル、コトニ定リヌ、是金本位制ノ再ビ當初ニ復シタルモノナレド、亦幣制上ノ一大改革ト謂フベシ。

(三三)條約改正事件ノ進行ヲ問フ 我ガ政府ハ、舊幕府ノ時締結セル條約中 我ニ不利ナル條項アルヲ以テ、之ヲ改正センコトヲ各國ニ求メシニ、年久シク 決セザリキ、然ルニ明治二十五年、陸奥宗光外務大臣タルニ及ビ、銳意條約改 正ニ着手シ、二年ヲ經テ英國トノ條約改正成リ、尋イテ米國、伊國、露國、佛 國、獨國等ノ條約改正亦成功ヲ告ゲ、稅權及ビ法權ヲ我ニ收ムルコト、ナレリ、 是我ガ國勢ノ振張セル結果ト謂フベシ。

受驗 必携 日本歷史問答終

附錄 御歷代表 第一

八	七	六	五	四	三	二	一	代	天	皇	御	父	御即位ノ年、紀元
孝	孝	孝	孝	懿	安	綏	神	天	神	武	天照大神ノ玄孫 鸕鷀草葺不合命	武	一
元	靈	安	昭	德	寧	靖	武	八〇	一〇	崇	神	開	九
孝	孝	孝	懿	安	綏	神	武	一〇	崇	神	開	化	九
靈	安	昭	德	寧	靖	武	一	一六	仁	德	應	神	一六
四四七	三七一	二六九	一八六	一五一	一一三	八〇	一	一五	應	神	仲	哀	一五
一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	一四	仲	哀	景行天皇ノ皇子 日本武命	行	一四
仁	應	仲	成	景	垂	崇	開	一三	成	務	景	行	一三
德	神	哀	務	行	仁	神	化	一二	景	行	垂	仁	一二
應	仲	哀	景	垂	崇	開	元	一一	垂	仁	神	神	一一
神	哀	哀	行	仁	神	化	元	一〇	崇	神	開	化	一〇
九七三	九三〇	八五二	七九一	七三一	六三二	五六四	五〇四	一	九	開	化	元	九

二七	履中	仁德	一〇六〇
一八	反正	同	一〇六六
一九	允恭	同	一〇七二
二〇	安康	允恭	一一一四
二一	雄略	同	一一一七
二二	清寧	雄略	一一四〇
二三	顯宗	履中天皇ノ皇子 押磐皇子	一一四五
二四	仁賢	同	一二四八
二五	武烈	仁賢	一二五九
二六	繼體	應神天皇ノ玄孫 彥主人王	一二六七
二七	安閑	繼體	一一九四
二八	宣化	同	一一九六
二九	欽明	同	一二〇〇
三〇	敏達	欽明	一二三二
三一	用明	同	一二四六
三二	崇峻	同	一二四八
三三	推古	同	一二五三
三四	舒明	敏達天皇ノ皇子 彥人大兄	一二八九
三五	皇極	敏達天皇ノ皇孫 茅渟王	一三〇二
三六	孝德	同	一三〇五

三七	齋明	皇極重祚	一三二五
三八	天智	舒明	一三二八
三九	弘文	天智	一三三二
四〇	天武	舒明	一三三三
四一	持統	天智	一三五〇
四二	文武	天武天皇ノ皇子 草壁皇子	一三五七
四三	元明	天智	一三六八
四四	元正	草壁皇子	一三七五
四五	聖武	文武	一三八四
四六	孝謙	聖武	一四〇九
四七	淳仁	天武天皇ノ孫 舍人親王	一四一九
四八	稱徳	孝謙重祚	一四二五
四九	光仁	天智天皇ノ孫 志貴親王	一四三〇
五〇	桓武	光仁	一四四二
五一	平城	桓武	一四六六
五二	嵯峨	同	一四七〇
五三	淳和	同	一四八四
五四	仁明	嵯峨	一四九四
五五	文徳	仁明	一五一一
五六	清和	文徳	一五一九

八五	八四	八三	八二	八一	八〇	七九	七八	七七	代
仲	順	土御門	後鳥羽	安	高	六	二	後白河	天皇
恭	德	後鳥羽	同	德	倉	條	條	同	御父
順	同	後鳥羽	同	高	後白河	二	後白河	同	年御即位ノ
德		源賴家	源賴朝	倉	一八二九	條	一八一九	一八一六	紀元
一八八二	一八七一	一八五九	一八四六	一八四一		一八二六			武將
	源實朝	源賴家	源賴朝						
九四	九三	九二	九一	九〇	八九	八八	八七	八六	代
後二條	後伏見	伏見	後宇多	龜山	後深草	後嵯峨	四條	後堀河	天皇
後宇多	伏見	後深草	龜山	同	後嵯峨	土御門	後堀河	高倉皇子守貞	御父
一九六二	一九五九	一九四八	一九三五	一九二〇	一九〇七	一九〇三	一八九三	一八八二	年御即位ノ
	久明親王		惟良親王		宗尊親王	藤原賴嗣		藤原賴經	武將

五

六六	六五	六四	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七
一條	花山	圓融	冷泉	村上	朱雀	醍醐	宇多	光孝	陽成
圓融	冷泉	同	村上	同	醍醐	宇多	光孝	仁明	清和
融	泉		上		翻	多	孝	明	和
一六四七	一六四五	一六三〇	一六二八	一六〇七	一五九一	一五五八	一五四八	一五四五	一五三七
七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七
近衛	崇德	鳥羽	堀河	白河	後三條	後冷泉	後朱雀	後一條	三條
同	鳥羽	堀河	白河	後三條	同	後朱雀	同	一條	冷泉
一八〇二	一七八四	一七六八	一七四七	一七三三	一七二九	一七〇六	一六九七	一六七七	一六七二

四

九五	花園	伏見	一九六八年	守邦親王
九六	後醍醐	後宇多	一九七九	
九七	後村上	後醍醐	一九九九	
九八	後龜山	後村上	二〇二八	
九八	後小松	後圓融	二〇四三	足利義滿
	後圓融	後光嚴	二〇三二	
	後光嚴	同	二一一二	足利義詮
	崇光	光	二〇〇九	足利尊氏
	光明	同	一九九六	
	光嚴	後伏見	一九九二	
代	天皇	御父	御即位年 紀元	武將

北朝持明院流皇統

御歷代表 第二

代	天皇	御父	御即位年 紀元	武將
一〇〇	稱光	後小松	二〇七二	足利義持
一〇一	後花園	崇光天皇ノ 皇孫貞成親王	二〇八八	足利義教
一〇二	後土御門	後花園	二一二四	足利義隆
一〇三	後柏原	後土御門	二一六〇	足利義隆 (復任)
一〇四	後奈良	後柏原	二一八六	足利義晴
一〇五	正親町	後奈良	二二一七	足利義昭
一〇六	後陽成	正親町天皇ノ 皇子誠仁親王	二二四六	織田信長 豐臣秀吉 豐臣秀次 德川家康
一〇七	後水尾	後陽成	二二七一	德川秀忠
一〇八	明正	後水尾	二二九〇	德川家光
一〇九	後光明	同	二三〇四	
一一〇	後西院	同	二三一六	德川家綱
一一一	靈元	同	二三二三	德川綱吉
一一二	東山	靈元	二三四七	德川家宣
一一三	中御門	東山	二二七〇	德川家繼

二一七	二一六	二一五	二一四
後桃園	後櫻町	桃園	櫻町
桃園	同	櫻町	中御門
二四三一	二四二三	二四〇七	二三九六
德川家治		德川家重	德川吉宗
一一二	一一〇	一一九	一一八
今上	孝明	仁孝	光格
孝明	仁孝	光格	東山天皇ノ 皇孫典仁親
二五二七	二五〇七	二四七七	二四四〇
德川慶喜		德川家茂	德川家慶

八

明治卅一年五月十日印刷
同 年五月十五日發行

(定價金參拾五錢)

金港堂書籍株式會社編輯所編輯

發行兼印刷者

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

版權所有

代表者

右社長

原亮三郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

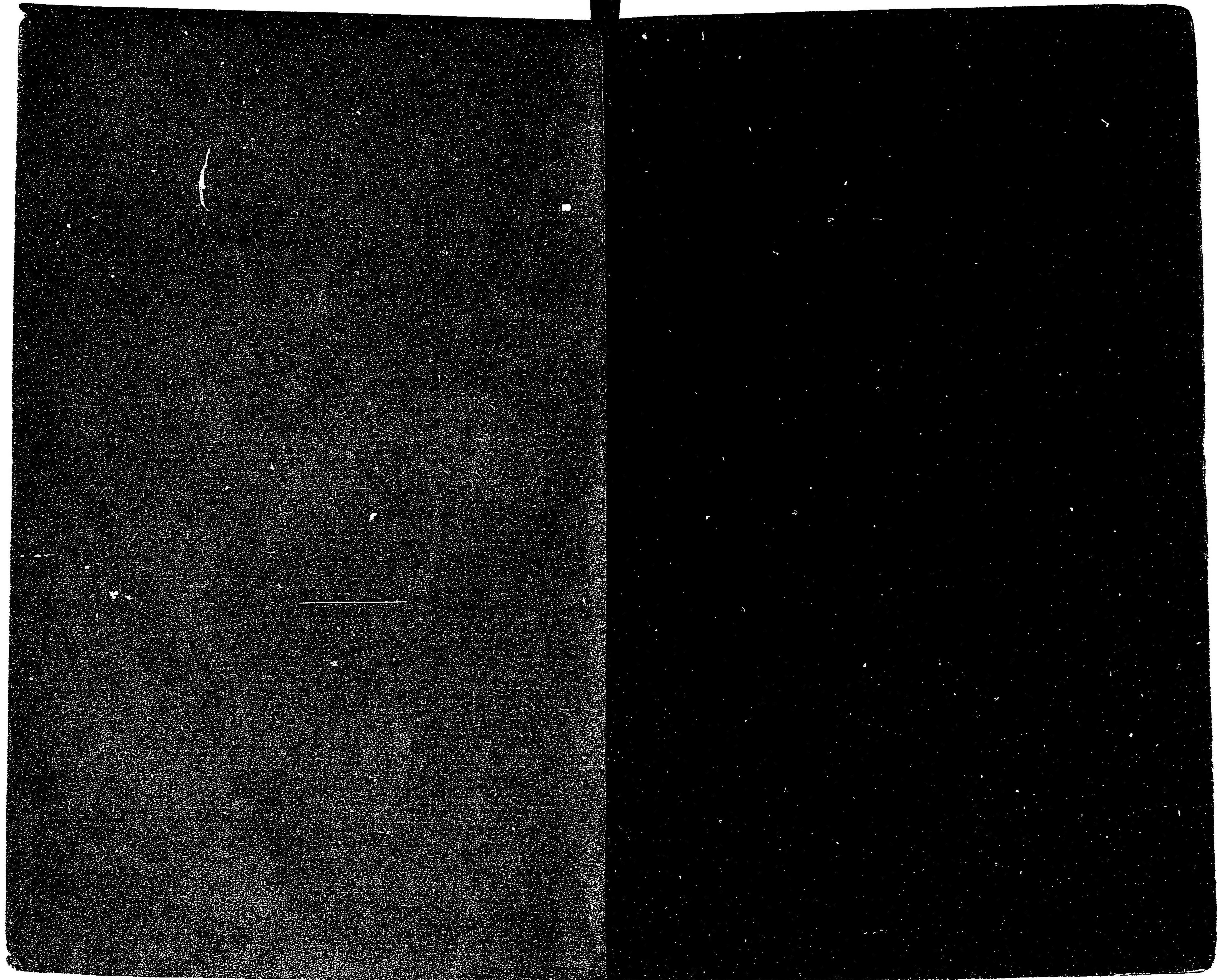
賣捌所

各府縣特約販賣所

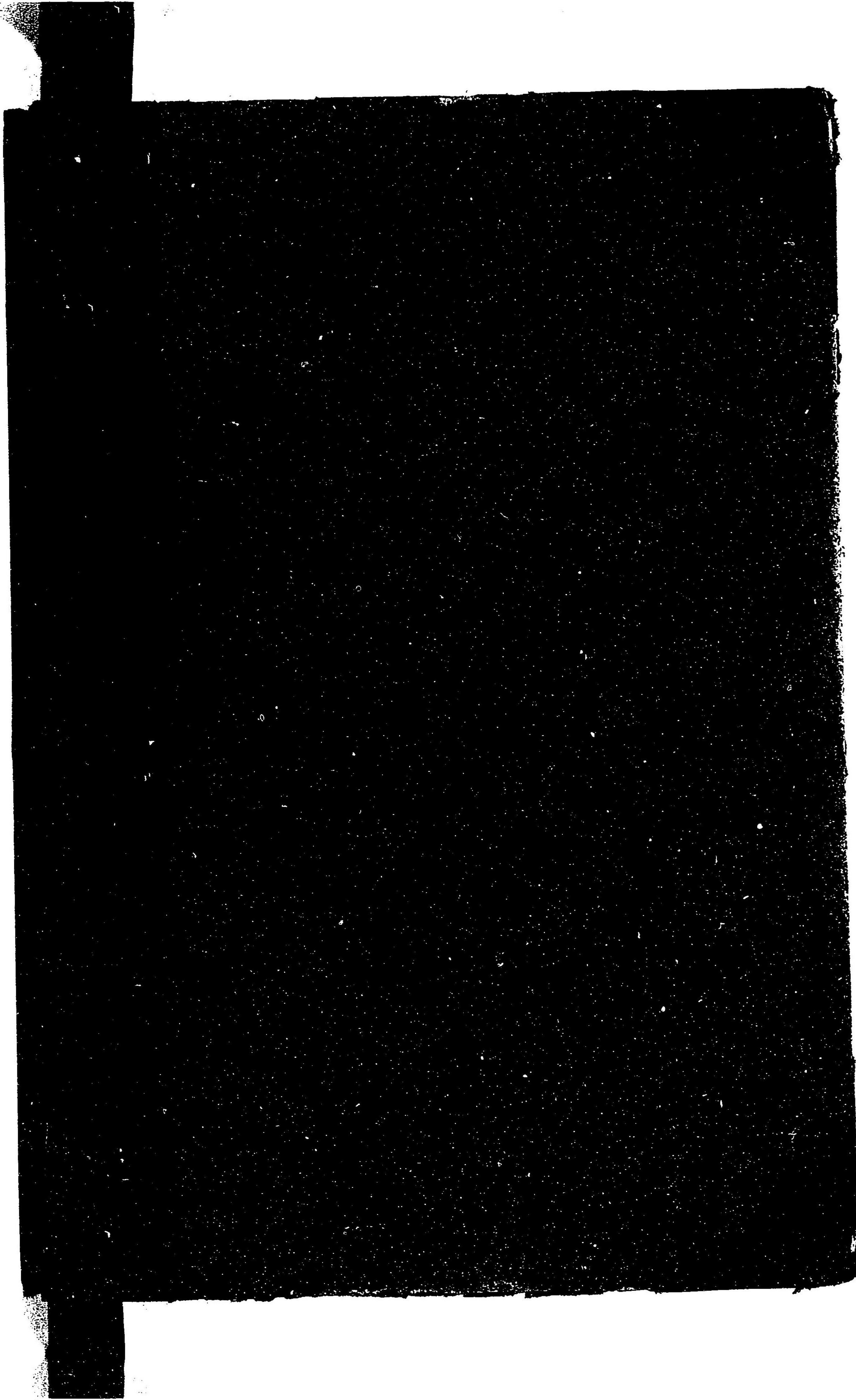
(告廣書科教史歷及理地)

小川銀次郎氏著	小辰巳銀次郎氏著	新宅保磐次氏著	高津敏三郎氏著	三宅米吉氏校	新保磐次氏著	新保磐次氏著	三宅米吉氏校	三宅米吉氏校
◎西	◎萬	◎訂補	◎新本	◎訂中	◎體新	◎體新	◎中學	◎中學
洋	國	日	邦	學	內	內	外	日
史	史	本	小	日	國	國	國	本
要	要	史	史	地	地	地	地	地
		要	史	誌	誌	誌	誌	誌
全	全	全	全	全	全	全	全	全
價	價	價	價	價	價	價	價	價
金	金	金	金	金	金	金	金	金
一	八	各	各	六	五	六	七	六
壹	拾	四	四	拾	拾	拾	拾	拾
圓	錢	拾	拾	錢	錢	錢	錢	錢
冊	冊	五	五	冊	冊	冊	冊	冊
		錢	錢					

(社會式株籍書堂港金番十七町市東京兌發)



80
42



049640-000-3

80-42

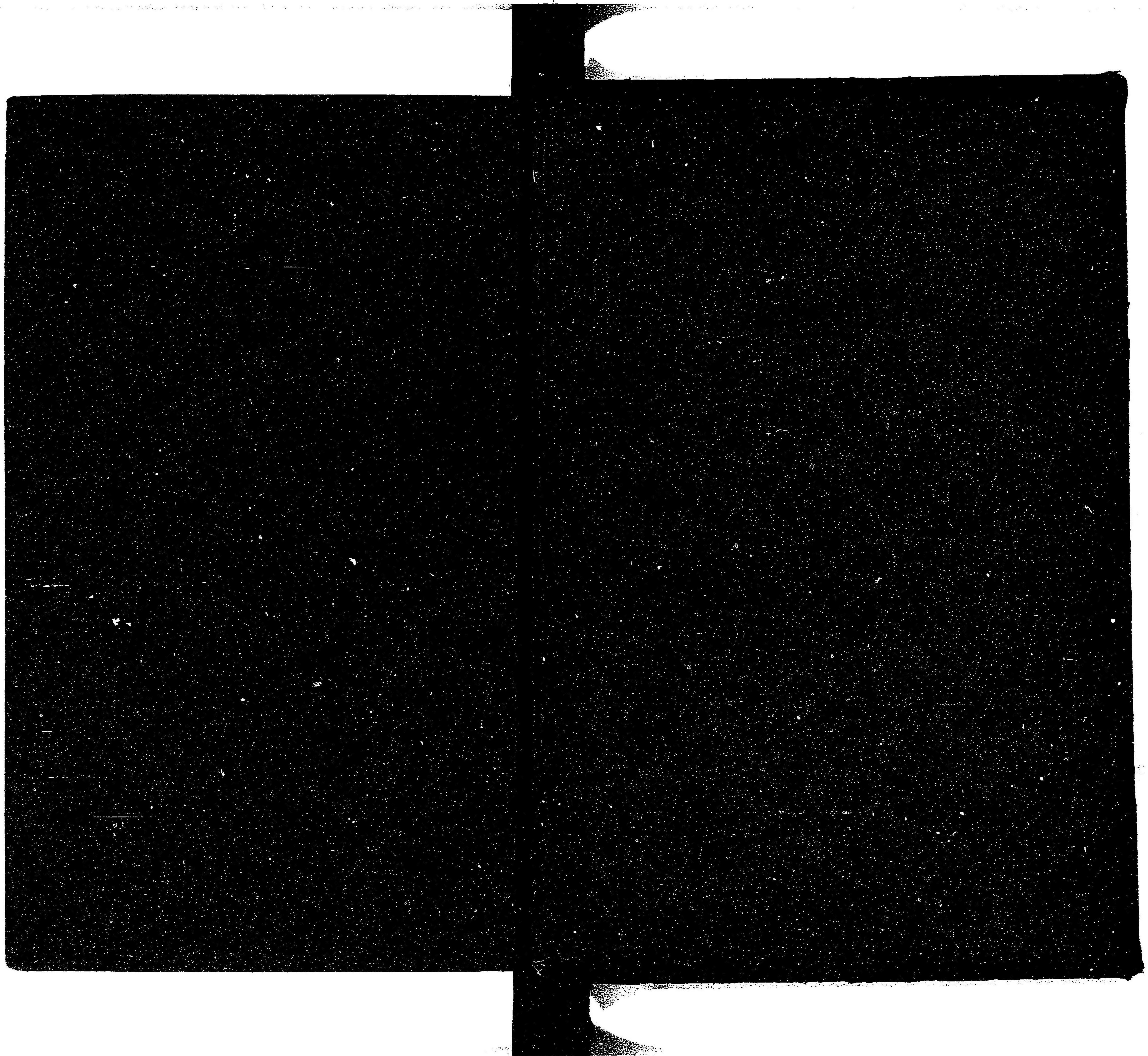
日本歴史問答 (受験必携)

金港堂

M31

BEM-0343





80
42

必勝日本歷史圖卷
全